

新刊紹介

大隅昇・鳩真紀子・井田潤治・小野裕亮 訳
『ウェブ調査の科学—調査計画から分析まで—』
(朝倉書店, 2019年)

井上 希*

本書は2013年に出版された原著“*The Science of Web Surveys*”の日本語翻訳版であり、近年多くの調査機関で導入が進んでいるインターネットを利用したウェブ調査導入に伴う利点と限界に焦点をあて、これまでに行われた研究を基として整理と考察を行っている。

本書の構成は原著と同様に全8章となっているが、これに加えて用語集や国内外の文献、関連学会・機関の紹介、国内におけるインターネット調査の現状についてまとめられた補章が設けられている。また、本書は「総調査誤差」の枠組みを採用しているが、Kish (1965) に則り、母集団の代表性にかかわる誤差の「非観測誤差」と回答の正確性や妥当性にかかわる誤差の「観測誤差」に大別し議論を進めている。

まず、第1章から第3章ではウェブ調査における基本的な用語や標本の抽出法、無回答誤差といった非観測誤差に関する解説が中心となっている。おおむねウェブ調査ではほかの調査方法と比較して非観測誤差が大きくなる傾向があるが、これに対して事後層化法やレイキング法といった加重調整を行うことである程度の偏りが解消できると述べられている。

一方で、第4章から第7章では、ウェブ調査の設計方法と観測誤差への影響や低減方法について解説が行われている。ウェブ調査は非観測誤差が大きくなる傾向があると先述したが、一方で、非観測誤差については低減できる可能性があるとされる。それは、例えば第5章で述べられているとおり、質問文と

ともに画像や映像を用いることで質問に対する解釈を補助し、また、ウェブ調査はほかの調査と異なり回答者の進捗で自記式に実施できるため、第7章に記載のとおり「認知的負担」の軽減につながる。

最後に、第8章ではこれまでの章の要約を行うとともに、今後のウェブ調査に対する展望が述べられている。

以上が本書の概要である。なお、原著の出版から6年が経過しており、世界的にウェブサービスの需要において多くの変化があった。第1に、本書内においても記載のあるとおり、世界的にスマートフォンが急速に普及した点である。回答者のスマートフォンの積極的な活用に伴い、ウェブ調査にこれまで内在されていた“primacy effect”や“speeding”をはじめとする非観測誤差等に対し、どのような影響を与えたか後の研究で明らかにされることが期待される。

第2に、2020年は世界的な新型コロナウイルス(COVID-19)の蔓延に伴い、ウェブ調査に限らず、ウェブ会議、リモートワークといったインターネット等によるウェブサービスの需要が極めて高まった点である。本稿記載時点で上記の感染リスクは未だ高く、今後ウェブ調査を導入する団体・企業等は益々増加することが予測される。このような背景の中で、ウェブ調査導入に伴う利点と限界を先行研究に鑑みて俯瞰している本書は、初学者に限らず多くの専門家や調査担当者にとって有益な1冊となるだろう。

(いのうえ・のぞむ)

* 国立社会保障・人口問題研究所 社会保障基礎理論研究部研究員